Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-28

アジアにおける国文学 : 台湾の〈日本文学研究〉の一端（特集 「アジアの中の「国文学」」）

楊, 錦昌

(Citation)
國文論叢,32:26-39

(Issue Date)
2002-08-10

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012961

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012961

〈報告〉

アジアにおける〈国文学〉

——台湾の〈日本文学研究〉の一端——

楊　錦　昌

一

ポスト・コロニアリズム、ポスト・モダニズムといったグローバル性、ダイナミズム性にみちあふれた理論が、世界各地でめざましく流行している近年、各学問の専門分野が、これらの動きに触発され、さまざまな試練や挑戦を受けている。そのため、それぞれの専門分野・学科の位置付けや役割、担うべき責任を改めて考えなおそうという声が相次いで出てきたのは、周知のことであろう。にもかかわらず、日本では、不況の直撃を受けたこともあり、大学における文科系の再編や解体といった危機的状況に陥ってしまうことになった。これに対し、日本の南西にあり、〈宝島〉の通称を持つ台湾は、どうであろうか。

一九九二年から、台湾では小中学校から大学にわたって全面的に教育改革を実施しようという動きがはじまり、それに伴い、大学でも統一入試を廃止して、多元的入学プランが改革の第一歩として議論されてきた。そしてついに今年（二〇〇二年）、ようやく全面的に多元的入学プランが実施され、五〇年近く行われてきた大学の統一入試が廃止されることになった。大学数も約一五〇校と以前の六、七倍もの数になってきた（付記3）。また、この中のおよそ五分の一（三〇校以上）の大学に日本語関係の学科ができ、そのうち約五分の四は、一九九六年以後に設置されている。また一九九六年に銘傳大学が従来の「日本語文学系」（日本語文学科）との差異化を図る目的で、「応用日語学系」（応用日本語学科）を設置したように、その後〈実用的〉日本語がブームになり、〈実用的〉日本語の教育に主眼を置く、いわゆる「応用日語学系」が次々と雨後の筍のように設置されるようになってきている。

これは、一見台湾や日本の不況・教育改革とは関係ないように見えるが、しかしこの〈応用的〉〈実用的〉を一途に求める現象は、もちろん大学間の激しい競争の中で質の高い学生を入れ、大学のランクを上げようとする試みと深く関連しており、また台湾社会全体で日本語を使っての仕事、特にビジネス関係の人材の需要が高まっていることとも関わっている。このような動きに対し、

いわゆる非「応用的・実用的」学科、「日本語文学系」は、これまでと同じく語学や文学の専門的人材を養成する役目を果たすのか、あるいは歴史の流れに棹さし、社会からの現実的な要請に応じて、ただ日本語を使って仕事ができる人材を養成するのかといった問題を検討しなおさねばならなくなってきている。

そこで、本論では最近もっとも非「応用的・実用的」とされる〈日本文学〉が、台湾の中ではどう位置付けられ、どのように研究されているのかを検討してみたい。本論の流れとしては、初めに台湾の日本語教育の歴史を顧み、それから「応用日語学系」に対する「日本語文学系」（学部・大学院）の教育現場、日本語教育関係の学会等、台湾における〈日本文学研究〉の場に即して、その実態をまとめたい（付記2）。

二

一九九六年まで、台湾で日本語教育というと、日本語（学）・日本文学を中心に人材を養成する教育だと考えられてきた。そこで、日本文学研究の実態を考察するにあたって、台湾の大学の日本語教育の歴史からまとめてみる。

台湾は、五〇年にわたる日本の植民地を経ているため、当然、母国語として日本語を教育されてきた人も多いが、残念ながら日本文学の研究に関わる人材は殆ど輩出されてこなかったと言える。つまり、戦前〈母国語〉として日本語教育を受けた知識人が、自分の日本語の才能を生かし、日本文学の研究に従事することは殆どなかった。

こういった状況は一つには日本の植民地政策に由来していると考えられるが、さらにもう一つの理由として、一九四九年に国民党政府が台湾に引き上げてきた後、反日感情のため意識的に日本語・日本文学の人材の養成に努めなかったことも、日本語教育の人材の中絶につながってしまったと考えられる。

政府は、この傾向について後に考え直し、一九六三年八月に私立中国文化大学（元私立中国文化学院）に「東方語文学系日文組」の開設許可を下した。これは、戦後はじめて、大学に日本語文学関係の講座を設けるものであった。ただし、当時の開設の方針としては、国益のために日本との交流に貢献しうる人材を育成するものであった。その際、〈実用性〉の低い日本文学関係の科目は、カリキュラムに取り入れられたものの、重視されることはなかった。

以後、一九六六年に私立、淡江大学（元私立淡江文理学院）に「東方語文学系」、一九六九年に私立、輔仁大学に「東方語文学系」、一九七二年に私立、東呉大学に「外国語文学系東方語組」という日本語文学関係の学科と講座が、相次いで設置されることになった。当時の国民党政府が、計画的に、三年ごとに私立大学に「東方語文学系」という学科名で、日本語文学関係の学科の設置を許可したことが分かる。そしてここで注意されるべきは「東方語文学系」という名称が、実際は日本語文学科のことを指し、日本以外のアジアの国々の言語や文学はいっさい取り扱っていない、ということである。このように意図的に〈日本〉を使わなかったのは、いうまでもなく歴史的に反日感情を持つ政府の取った方針と思われる。結局、最近まで国立大学には、日本語文学関係の学科や講座のないままであった。

台湾史上初めて、国立大学に日本語文学の関連講座が設置されたのは一九八九年のことで、国立政治大学に「東方語文学系日文組」（現在「日本語文学系」）という学科名で開設された。だが、これは私立大学より二六年も遅れてしまったのである。この二六年間に日本語文学の教育や研究の役割を果たしてきたのは、文化、淡江、輔仁、そして東呉の四つの私立大学に限られていた。この四校は、〈応用系〉（私立銘傳大学・国立高雄第一科技大学）の大学の大学院と異なり、台湾で歴史の長い「日本語文学系」の大学院（修士課程）がある大学で、現在、日本語文学の教育及び研究をする重要な機関にもなっている。特に東呉大学は、一九九一年には台湾唯一の日本語文学の博士課程が設けられていた。しかし、残念ながら、一九九七年から論文指導の専任教師が足りず、しばらく休止することとなった。

なお、一九九二年に私立東海大学が「日本語文学系」を設立したのをきっかけに、台湾北部に偏っていた大学の「日本語文学系」がようやく台湾中部にも広まった。そして、一九九四年に台湾一の名門大学の国立台湾大学が社会からの要請に応え、「日本語文学系」を設置した。また、一九九九年に台湾中部にある私立静宜大学が、「応用日語学系」設置の風潮にもかかわらず、「日本語文学系」を設置したのは、極めて異色で意味深いことと思われる。その理由は、この系の研究方針に日本植民地期の研究が掲げられている点が挙げられるが、これについては後に詳しく述べる。

三

二章で取り上げた「日本語文学系」の大学は、主に、八校挙げられるが、この八校を再び大学院の有無により、二組に分けて、日本文学を専攻する大学教師、日本文学関係のカリキュラム、学科紀要、そして学術活動を通し、台湾の日本文学研究の一端をまとめてみる。

大学院があるのは、文化、淡江、輔仁、そして東呉の四つの私立大学である。次に、大学院の成立順序に沿って述べていこう。

中国文化大学の教育方針は、台湾と日本の交流に貢献しうる人材を養成することで、一二校もの日本の大学と姉妹関係を結んでいる。専任教師は、一七名で、日本文学専攻の教師は専任が五名（文学総論二名、古典一名、近代二名）で、非常勤講師（学部は含まない）は一名である。大学院には、文学関係のカリキュラムとして、中日比較文学研究（必）、日本古典文学研究（選）、日本近現代文学（選）が、学部には、日本名著選読（必）、日本文学史（必）、日本古典文学（選）が挙げられている。そして『中日文化』という学科紀要が一九七一年六月から発行され、すでに二〇号を数える。ただし、ここ五年に限れば、日本文学関係の論文は四本のみである。これに二〇〇〇年三月二〇、二一日に行われた「第一回　日本研究・台日関係・日本語教育国際シンポジウム」の論文集を加えればおよそ一〇本となる。日本文学史の時代によって分けると、上代一本（万葉集）、中古一本（うつほ物語）、近世一本（国姓爺合戦）、近現代七本（夏目漱石一本、芥川龍之介一本、石川啄木二本、佐藤春夫一本、火野葦平一本、井上靖一本）という結果となっている。

次は、日本語教育を重んじている東呉大学についてである。台湾で日本語教育の人材を養成することを第一の方針としつつも、

その他に日本文学も教育方針の一つとしてはっきり取り上げられている。これは特に修士課程の場合にそうである。というのは一九八〇年五月に修士課程「日本文化研究所」を設立して以来、現在、学部と大学院を合わせ、二三名の専任教師と四九名の非常勤教師を抱え、他の大学以上に多い。ただし、専任教師の専攻は殆ど日本語学と日本語教育で、文学専攻の教師は、専任がわずか三名（中世一名　近代二名）いるだけである。そして、兼任非常勤（大学院）が二名で、中の一人は淡江大学に所属している。それから、カリキュラムをみると、文学関係の科目は、学部には日本名著選読（必）、日本近代文学（選）、日本文学史（必）、現代日本小説選読、日本故事選読（選）、日本古典文学（選）が、修士課程には日本文学研究（一）（二）、日本現代文学研究、日本古典文学研究、中日比較文学研究が、そして博士課程には日本文学専題討論、比較文学専題討論、比較文学専題討論、台湾文学與日本文学比較研究が開講されている。また、『東呉日語教育学報』という学科発行の研究雑誌が一九七六年に創刊され、すでに二四号が発行されている。ここ五年内に刊行された日本文学関係の論文の本数は八本で、例外なく近代文学に限られており、泉鏡花、夏目漱石、有島武郎、正岡子規、有吉佐和子、岡本かの子についての研究である。『東呉日語教育学報』のほかに、一九八五年一二月から東呉大学外語学院が発行する外国語学部の研究紀要『東呉外語学報』もある。ただし、日本文学の研究論文は第一〇号（一九九四年一二月）に初めて出され、二〇〇〇年五月に出た一五号まで三本（古典一、近代二）しか発表されていない。これらの研究論文は、大体、一九九〇年四月から行われている「東呉日語教育研究発表会」、一九九八年から外国語学部の各学科により行われている「系際学術研討会」において口頭発表されたものが収められている。その他、一九九三年六月一九、二〇日に行われた国際会議の論文集『日語教學研究國際研討會論文集』（竹取一、志賀二、野上弥生子一〈中古一、近代三〉）と、二〇〇〇年一二月一六日に行われた国際会議の論文集『新世紀之日語教學研究國際會論文集』（「日本語教育における『文学の授業』の可能性への探求」という論文の他に文学関係の論文はない。）、『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平』（一九九一年五月一五日、鴻儒堂）、そして『蜂矢宣朗先生傘寿記念論文集』（源氏・平家・長恨一、迷路一、春夫二〈古典一、近代三〉）等の成果がある。以上述べた著書や論文を計算すると、古典三本（中古一、中世二）、近代一七本（著書一、論文一六）が見られる。ただし、五年内のものに限定すると、古典二本、近代一三本となっている。

続いて、地域研究を重視している淡江大学についてである。全体的に、方針としては、学部では「優秀日本語文人才」（優秀な日本語・「文」の人材）を養成することが、大学院（一九八三年にできた「日本研究所」）では法律、政治、経済、貿易、外交、人文といった分野の研究に明るい人材を養成することが挙げられている。専任教師は学部と修士課程を合わせて二二名で、非常勤講師は、三九名で、校内の兼任教師は三名である。中には、日本文学関係の教師は、学部には専任が四名（近代三　中日比較一）で、兼任が一〇名（近代二　日本文学七　古典一）であり、大学院には殆ど法学、経済、商学の教師で、文学を専攻する教師は一人もいない。これは、修士課程に文学研究コースがないことによ

るのであろう。同じ傾向は、修士課程に文学関係の科目が一つもないということにも反映されている。だから、日本文学、もしくは日本文学研究については、学部に設けられた日本文学関係の科目（日本名著選読〈三年・必〉、日本名著選読〈四年・選〉、日本文学史〈必〉）と、日本文学を専攻する学部の教師が請け負っていることになる。研究紀要については『淡江日本論叢』が、現在まで一〇号発行されている。ここ五年内に発行された日本文学研究の論著は二一本（古典九〈上代二、中古二、中世一、近世四〉、近現代一一、日本文学全般一）で、研究されている作家及び作品は、日本書紀、蜻蛉日記、平家物語、上田秋成、浮雲・舞姫、成島柳北、白樺派、島崎藤村、志賀直哉、芥川龍之介、新美南吉、岡本かの子等である。なお、外国語学部が主となって開催してきた外国語教育の国際会議の回数は多いものの、日本文学の研究論文は思ったほど多くない。二〇〇〇年三月二一、二二日に開催された「国際化時代之外語教育国際会議」の論文集には、夏目漱石、新美南吉が一本ずつ、二〇〇一年八月「『亜洲中的日本・日本中的亜洲』国際学術会議」の論文集には、小泉八雲（一本）、夏目漱石（二本）、芥川龍之介（一本）が挙げられる。ただし、日本文学研究と直接関連している国際会議は、なんといっても、一九九一年に国際啄木学会と共催した「国際啄木学会台北大会」であろう。これは、台湾の日本文学研究においては大へん意味深いものである。その時発行された論集には、論文やコラムを合わせて計三五本が載せられている。

その次に、一九九三年に修士課程「日本語文学研究所」を設け、日本文学研究の重鎮といったイメージを持つ輔仁大学であるが、このイメージは実態に即しているのであろうか。確かに、各方面から検討してみると、文学に力を入れていると言えよう。まず、専任教師は一五名で、非常勤と兼任の教師を合わせて約四〇名である。その中で、中古から近現代にわたってそれぞれの時代の文学を専攻する専任教師が合計一〇名（近代三名〈川端康成三、筒井康隆〉、古典七名〈中古五　中世一　近世一〉）であり、他大学と比べてみても極めて珍しいことである。それに加えて、同じように文学を専攻する非常勤教師も、九名（近代四、児童文学二、古典三）いるのである。

それから、修士課程のカリキュラムを見れば、より一層その傾向は明らかとなる。修士課程には、平安朝日記文学研究（選）、平安朝物語文学研究（選）、日本近代文学中的女性（選）、中日比較文学研究（選）、当代亜洲文学和文化（選）、日本芸術文化（選）、日本近現代文学研究基礎篇（選）、日本近現代文学研究理論篇（選）といった科目が設けられ、学部には、日本児童文学（選）、日本名著選読（必）、日本近現代文学（必）、日本文学史（必）、日本古典文学（必）等が挙げられる。また、外国語学部の設けた「比較文学博士班」には、日本宗教文学研究（選）、遠藤周作宗教観（選）といった日本文学関係の科目も取り入れられている。こういったことから台湾において「文学の輔仁」といわれるのも無理はない。もちろん、学部の教育については、前述した大学とたいした変りはなく、修士課程において違いが明らかに現れているのである。さらに、輔仁大学は、学部と修士課程の方針が一貫しており、共に人文的方面から日本のことを深く理解・研究できる人材を育てることを最大の目標としている。なお、研究

紀要は現在まで二六号が発行され、台湾では最も早くに刊行されたものである。ここ五年内に刊行された文学関係の論文は、一九九七年七月『日本語日本文学』第二三輯（貝原益軒、和泉式部日記、平家物語、名人）、第二四輯（中江藤樹、日本書紀、篁物語、源氏物語・長恨歌、方丈記、雨月物語）、第二五輯（古事記、永井隆、貝原益軒）、第二六輯（芥川、永井隆、遠藤周作三）である。また、文学関係の国際会議の際に日本文学の研究論文が多く発表されている。ここ五年内に行われたものには、一九九七年三月二七、二八日「日本文学国際会議」（日本文学に見る死生観、芭蕉、遠藤周作、源氏・紅楼夢、鷗外、中世日記、筒井康隆、宇津保物語、反自然主義、比較日本文化論〈中古三、中世一、近世一、近代二、現代二、比較文化論一〉、一九九七年九月二〇日「日本語文学国際会議」（一九九八年三月『日本語文学国際会議論文集』芥川、韓国と日本文学、漱石、平家物語、平家物語と漢書、源氏物語と長恨歌、和泉式部日記〈中古二、中世二、近代二、韓国詩人金素雲一〉、一九九八年四月一二日「台湾日本語文学研討会」、一九九九年五月二三～二五日「飲食文学国際研討会」（〈漂泊詩人石川啄木的精神構造――従飲食和歌管窺〉、中国語訳の論文集『趕赴繁花盛放的饗宴――飲食文学国際研討会論文集』〈林水福、焦桐編集、一九九九年一二月、時報出版〉、一九九九年七月『邁向二十一世紀的日本研究国際会議論文集』（王朝和歌、夢十夜、和泉式部日記、奥の細道、古事記、篁物語、枕草子、羅生門、大地の子、鷗外〈上代一、中古四、近世一、近代二　ほか三〉、二〇〇〇年七月『二十一世紀における日本文学の展望国際会議録』（万葉集、伊勢物語、日記文学、和泉式部日記、中世の「無」の美、江戸文学の将来、明治時事小説、ある女、芥川、宮沢賢治、永井隆〈上代一、中古三、中世一、近世一、近代四、永井隆一〉、「基督宗教與文学研討会」（二〇〇〇年一一月一八日）、（二〇〇〇年一二月二二、二三日「近代日本與台湾研討会」）、「中日近代詩国際会議」（二〇〇一年五月一五日）、「中日近代詩翻訳座談会」（二〇〇二年三月一五日に台湾文学協会との共催）などが挙げられる。一九九七年以前もいくつか文学関係の国際会議が行われているが、特に注目されるのは、一九八七年九月三〇日に開催され、日本の作家、遠藤周作が出席した第一回「文学與宗教国際会議」（輔仁大學外語学院編『文學與宗教――第一屆國際文學與宗教會議論文集』〈時報文化出版、一九八七年九月三〇日〉〈遠藤周作五〉、さらに二〇〇一年一一月二三、二四日に開催され、作家の小川国夫が出席した第四回「文学與宗教国際会議――当代文学中的靈光」（小川国夫「聖経與芥川竜之介」、富岡幸一郎「小川国夫的文学與基督教」）、そして一九九三年一一月二六、二七日に行われた「源氏物語国際会議」（源氏関係の論文八〈その中比較三、近代との関連一、韓国一、展望一〉、中国語訳の論文集『第一屆源氏物語国際会議論文集――源氏物語是什麼？』〈林水福編、麥田出版、一九九九年三月一日〉）であろう。これは、研究者間の交流に限らず、作品をめぐって直接作家との対話も行われ、斬新な試みとして位置付けられる。また、『源氏物語』という一つの作品に集中して国際会議を行った試みも、非常に意味深い。さらに前述したもののほかに、不定期的に社会人向けに行われている日本近代文学講習会も挙げられる。これまでに開催されたのは、一九九九年六月二五日に行われた「日本近代文學講習

會――石川啄木研究――」と、一九九九年七月六日に行われた「日本近代文學講習會――芥川龍之介文學研究――」である。「日本語日本文学研究発表会」、「龍晴会」といった教師間の研究発表会や論文検討会も行われている。

上述した内容から見て修士課程を設けた「日本語文学系」の大学は、それぞれ学科の設立趣旨や方針に従って特色を打ち出そうという方向性が明らかに見える。ただし、いわゆる日本文学研究は、輔仁大学を除けば、殆どカリキュラムの面でも専攻教師の面でも極めて貧弱であるように思われる。しかし、近年では周縁に位置付けられながらも台湾社会のために積極的に発言し、台湾と日本の間の回路を作り出そうという動きも多少見えてきた。具体的な成果としては、国際会議の開催や中国語版の論文集の翻訳や日本近代文學講習會の開催や日本植民地時代の作品研究への関心等が挙げられる。この背景には一体どんな原因があるのだろうか。

島国である台湾は既存の資源を利用し、世界の国々と貿易関係を結ぶことにより国を支えてきた。その結果、ダイナミックなことを好み、外国文明や文化を受け入れやすい。だから、国際的な交流活動、いわゆる国際会議が頻繁に開催されることもこれらの傾向と関係しているかもしれない。そして、こういった文化交流を頻繁に行うことによって、台湾においてはマージナルな日本文学研究を活性化させることが可能になり、また〈外部〉（台湾以外の日本文学研究の分野）と〈内部〉（台湾内部の日本文学研究以外の分野）の対比により初めて自分の日本文学研究のスタンスを確認することができよう。これは、せんじつめれば、〈台湾〉のアイデンティティーの確認にもなるだろう。もう少し具体的にいうと、台湾の日本文学研究（者）は、日本語や日本文学の教育に従事するほかに、日本文学、若しくは台湾文学（特に日本植民地時代に日本人作家が台湾をテーマに書き上げた作品、及び台湾人作家の日本語で書いた作品の研究）を研究対象として、少しでも台湾の社会、歴史、そして文化といったものとのつながりの中で日本語教育、日本文学研究に従事することになる。そして近年、中国文化をよその文化として切り離すいわゆる〈本土化〉の論調が盛んになり、二〇〇〇年から国民党政府が野党になって以来、この傾向はよりめざましい広がりを見せてきた。そういうわけで、輔仁大学の開催した国際会議（特に「近代日本與台湾研討会」）「中日近代詩国際会議」「飲食文学国際研討会」）・「日本近代文學講習會」及び中国語版の論文集の出版、文化大学の「第一回　日本研究・台日関係・日本語教育国際シンポジウム」、淡江大学の「『亜洲中的日本・日本中的亜洲』国際学術会議」、そして東呉大学の出版した『南方憧憬――佐藤春夫と中村地平』及び「新世紀之日語教學研究國際會議」で発表された〈文学〉と〈教育〉を結んだ「日本語教育における『文学の授業』の可能性への探求」といった論文からは、こういった動きの一端が見られる。また、日本語学・日本文学の研究分野では、台湾内でも日本語で発表すべきであるという暗黙の了解があったが、ここ数年日本語の分からない台湾の人々を対象として中国語版の論文集『文學與宗教――第一屆國際文學與宗教會議論文集』、『第一屆源氏物語国際会議論文集――源氏物語是什麼？』、『趕赴繁花盛放的饗宴――飲食文学国際研討会論文集』等が出版され、中国語での論文発表を試みることもあり、また「日本近代文學講習會」が行われるといった傾

向にあるのである。台湾の〈日本文学研究〉の分野にも〈実用的・応用的〉な側面が見えてきたといえよう。ただこの〈実用的・応用的〉な側面は、日本語を使っての仕事、特にビジネス関係の人材を養成する〈応用系〉の「日本語学科」の求めるものとは質的に違うであろう。では、大学院のない「日本語文学系」には果たして同じ動きや傾向が見られるだろうか。

四

三章で取り上げたのは、修士課程の設置されている大学で、これから紹介するのは、学部だけが設置されている「日本語文学系」である。これらの大学にははたして前述した〈動き〉と同様のものが見られるだろうか。では、次に設立順序に従って一九八九年に開設された政治大学から述べていこう。

前述したように、政治大学は、台湾史上初めて国立大学に日本語文学関連講座を設けた。学科の方針は、日本語学・日本文学はもちろん、それに基づいて文科系の学際的な研究のできる人材を養成することである。私立の二クラス（一クラスの学生数は六〇～七〇人前後である。夜間部を入れると、倍になる）と違い、一学年は一クラスで、学生数は三四名しか入れない。それに対し、専任教師は、客員教師を入れて九名で、非常勤講師は八名である。その中で、文学を専門とする専任教師は三名（近現代二、中世一）である。そして、文学関係の科目は日本名著選読文学組（選）、日本文学史（必）、日本専題研究文学組（選）の三科目である。学科所属の研究紀要は、まだ出されていないので、校内の研究紀要を利用する場合、『国立政治大学学報』を利用することがある。国際会議は、積極的に行っているが、日本語教育関係のものに限られる傾向にある。

次は、台湾中部にある、一九九二年に成立した東海大学である。成立方針は、日本語を使って仕事のできる人材を養成することにある。専任教師は一二名で、非常勤教師は一七名である。文学専攻の専任教師は二名（近代一、比較一）に過ぎず、非常勤は一人もいない状態である。それから、文学関係の科目は、名著選読（選）、日本近代文学概論（選）、日本文学史（選）、日本古典文学（選）、台湾日語文学（選）が挙げられているが、中の「台湾日語文学」は、日本語で書かれた文学のことで、いわゆる「台湾文学」とも言える。にもかかわらず、これらの科目は、すべて選択科目にされている。そういったわけで、文学関係の国際会議はまだ開かれていないのも無理はない。なお、学科所属の研究紀要は、まだないので、校内のほかの研究紀要か校外の研究紀要しか利用できない。

そして、一九九四年に設置された台湾大学についてであるが、学科の方針として日本文学、言語、文化といった分野の研究できる人材を養成することが示されている。学生数は、原則として一学年に五五名以下にされ、教師数は、専任が一三名、非常勤が五名である。中に、文学専攻の専任教師は五名（近現代二、古典三）いる。それから、文学関係の科目は、日本文学名著選読（必）、日本近現代文学（必）、日本文学史（必）、日本古典文学選読（必）の四科目がある。また、二〇〇〇年一二月に創刊された『台大日本語文研究』の学科の研究紀要がある一方、国際会議を行った論文集も発行されている。研究紀要は、今現在二号刊行さ

れ、中には、文学関係の論文は三本（近代〈夏目漱石〉二、近世〈本朝水滸伝〉一）入っている。それに対し、「新世紀日本総合研究国際会議」（一九九九年一二月一八日）、「追求卓越的日本研究国際会議」（二〇〇〇年一二月二三日）、「二十一世紀的日本研究国際会議」（二〇〇一年一一月一〇日）といった国際会議の論文集を見てみると、日本文学関連の論文は一三本（中古五、中世三、近現代五）であった。しかし、中には、語学の分野に入れられるべきものが二つほどある。なお、作品や作家としては、大体源氏物語、落窪物語、徒然草、道元、夏目漱石、蒲原有明、西川満・池田敏雄等が挙げられている。修士課程がないとはいえ、学術研究に積極的に力を注いでいる意欲が強く感じられる。

また、同じ台湾中部にあり、一九九九年に「応用日語学系」設置の風潮に乗らず「日本語文学系」を成立させた静宜大学は、どうであろうか。文学専攻の教師は、専任が四名である。すべて日本近代文学の専攻で、中の二名は児童文学の専攻である。そして、日本文学を専攻している非常勤教師は一人に過ぎない。設けられている日本文学の科目は、日本児童文学（選）、日本近代小説選読（選）、日本近代韻文選読（選）、日本近代名著選読（選）、日本古典小説選読（選）、日本近代文学史（必）と挙げられている外に、台湾日文資料導読、台湾日文資料研究といった日本植民地時代の文献研究の科目があり、これを特色として他の大学との差異化をはかろうとする姿勢がかなり鮮明に見られる。そしてこういった態度からは海外研究を通して本国に貢献したいという意欲と責任感が感じられる。これは、つまり学科の設立趣旨に重なるものであろう。国際会議の開催や、論文集の発行はまだないが、学科設立の目標に照らして一つ筋が通った実践がなされている。

このように見てくると、日本植民地時代の帝国大学の文献を多く持っている台湾大学が他大学より日本文学研究や研究自体を重んじ、研究紀要を出し、国際会議に力を入れていることがわかるであろう。ただし、残念なことに修士課程がなく研究方向が限定されがちで、文献資料も有効的に利用されていないようである。

また、これらの大学のカリキュラムを修士課程の有する大学と比較すると、学部では「日本文学史」、「日本名著選読」が、修士課程では、「中日比較文学研究」が共通科目とされていることが分かる。一方、異文化の日本語教育を重んじる東海大学の「台湾日語文学」、〈近代〉に強く目を向ける静宜大学の「台湾日文資料導読」「台湾日文資料研究」、または東呉大学の修士課程の「台湾文学與日本文学比較研究」、現代西洋の文学理論をも取り入れながら設けた輔仁大学の修士課程の「日本近現代文學研究」〈基礎篇〉〈理論篇〉、「当代亜洲文学和文化」、「日本芸術文化」といった科目により、主に二つの現象が見えてきた。

一つは、前述したように辺境に置かれ、台湾文学にも日本文学にもまたがり、いずれにおいてもマージナルな存在とされてきた日本植民地期の〈文学〉に対する関心が高まり、これまでのように研究者個人の好みで研究されるものではなく実際に「日本語文学系」のカリキュラムに取り入れられるようになったことである。これは言い換えると、従来、植民統治期の〈台湾〉と〈日本〉をフィールドとした研究は、日本語関連の学科では殆どなされて来ず、そしてこのような周縁的領域のものは、往々にして、中国文学科や英文学科によって担われてきた。しかし、これらの学科で

は、テキストとなる〈日本語〉そのものが殆ど読めないため、〈翻訳〉を通しての研究とならざるを得なかったのである。そして今、「日本語文学系」がこういう問題に目を向けることにより、徐々に解決の道が探られようとしてきている。もう一つは、一点目と重なるが、西洋の文学理論が〈台湾の日本文学〉の分野にも取り入れられるようになってきたことである。

台湾における日本文学研究は、それ自体で完結するものではなく、最終的には台湾理解のための通過点としての日本文学研究という方向にシフトしてきた。それは、台湾の〈本土化〉の影響もあろう。もちろん、〈本土化〉というのは、けっして鎖国のように国を閉ざすことではなく、逆に世界の一員としての〈台湾〉、世界文化としての〈台湾文化〉を如何に位置付け、世界の中でその役割を果たしていくのかということである。言い換えれば台湾における日本文学研究（者）も〈本土化〉の論調とともに新たに位置付けや役割を問い直しているのである。だからこそ、カリキュラムも研究対象・テーマもいわゆる伝統的な〈日本文学〉〈日本文学研究〉には限定せず、むしろ一層幅広いものへと多様化してきた。このような傾向には当然〈伝統〉への〈揺り戻し〉や反発も生まれるに相違ない。しかし、こういったダイナミズムの中から新しい物の見方が生まれるのであり、それによってより一層研究が豊かなものに変化していくであろう。では、同じ傾向が台湾の日本語教育学会でも見られるであろうか。

五

台湾には、日本文学の名がついている学会はなく、日本語関係の学会は、「台湾翻訳学学会」（一九九七年）と「台湾応用日語学会」（二〇〇二年）を入れて五つが挙げられる。しかし、実際に日本文学研究の論文を受け入れているのは、「台湾日本語文学会」（一九八九年）、「台湾日語教育学会」（一九九三年）、「台湾日本語言文芸研究学会」（一九八九年）の三つである。「台湾翻訳学学会」は日本語ではなく、外の外国語の翻訳学が学会の中心で、「台湾応用日語学会」は、今年二月二日に設立されたばかりで、まだ方向性が確定しておらず、日本文学研究の論文を受け入れるかどうか、不明である。以下、主に「台湾日本語文学会」、「台湾日語教育学会」、「台湾日本語言文芸研究学会」の三つを取り上げて紹介しよう。

「台湾日本語文学会」は、実際学会として認可されたのは、一九九二年一〇月である。当時の名称は、「中華民国日本語文学会」であった。それ以前は「台湾日本語文学研究会」の名前で設立、学術活動がなされていた。なお、二〇〇一年に現在の名称へと変更された。設立当初から毎月例会を行い、毎年論文集「台湾日本語文学報」を発行しており、現在までにすでに一六号発行されている。ここ五年内（一二号～一六号）の文学関係の論文をまとめてみると、〈上代一、中古〇、中世一、近世一、近代一〇、文化三〉であった。研究された作品や作家としては、『万葉集』、連歌、夏目漱石、井伏鱒二、島崎藤村、石川啄木、小泉八雲、そして台湾文学と関連しているもの等が挙げられている。

次は、「台湾日語教育学会」の前身は一九九三年に設立された「中華民国日語教育学会」である。任期は、原則としては二年か三年で、各大学で交替して学術活動の関連事務をしている。事務

局もそれぞれの大学に付属されているが、代表事務局は各校の持ちまわりで、これまで東呉、淡江、輔仁大学と経て、現在台湾大学が受け持っている。そこでは日本語学、日本文学、そして日本語教育といった専門分野の会員や研究者に発表の場を提供するために、「台湾日本語教育論文集」の発行や国際会議の開催をしているのである。成立して以来、五号の「台湾日本語教育論文集」が刊行され、数多くの国際会議が行われた。学会の論文集（二号～五号）と、国際会議の論文集（一九九八年以後）を次のようにまとめておこう。

学会の論文集には、日本文学関係の論文数は、一五本あり、それぞれ、中古二本、中世一本、近世二本、近代九本と挙げられている。具体的な作品や作家としては、古今和歌集、宇津保物語、平家物語、国姓爺合戦、芭蕉、夏目漱石、佐藤春夫、石川啄木、平塚らいてう等が挙げられる。そして、一九九八年以後から行われた国際会議の論文集は、「日本語文学国際会議論文集」（一九九八年三月）、「邁向二十一世紀的日本研究国際会議論文集」（一九九九年七月）、「新世紀日本総合研究国際会議論文集」（一九九九年一二月）、「追求卓越的日本研究国際会議論文集」（二〇〇一年一月）、「二十一世紀的日本研究国際会議論文集」（二〇〇一年一月）が挙げられる。日本文学関係の論文数は、二五本あり、それぞれ、上代一、中古一〇本、中世五本、近世一本、近代八本と挙げられている。中には、韓国文学と台湾文学に関するものがあり、一応日本文学の論文数に入れなかったが、韓国と台湾の文学についての論は、それぞれ日本文学を視野に入れてはいる。また、研究対象となった作家や作品は、古事記、王朝和歌、源氏物語、落窪物語、篁物語、和泉式部日記、枕草子、無常観、平家物語、徒然草、道元、奥の細道、森鷗外、夏目漱石、蒲原有明、芥川龍之介、山崎豊子等である。ここで取り上げたものは、前述した共催の大学が編集した国際会議の論文集と重なっており、学会の業績に入れないことにしておこう。

それから、一九九九年に設立した台湾日本語言文芸研究学会は、「台湾応用日語学会」と同じく事務局が、台湾南部の台南にある「私立長栄管理学院外語中心」に付属している。研究発表会や日本の研究者を呼んで講演会もするが、やはり言語、教育方面のものが多く文学関係のものが少ない。具体的に挙げられるのは、二〇〇〇年一二月三〇日に創刊号として発行された論文集『日本言語文芸研究』第1号に掲載された石川啄木の研究論文だけである。これからの動向が期待される。

こうして見て明らかなのは、台湾で日本語関係の学会の成立はまだ日が浅く一〇年ほどしか経っていないということである。これは、日本語学の研究にせよ日本文学の研究にせよ九〇年代に入ってから、以前より重要視され始めたことによって裏付けられる。もちろん、それは前述した伝統のある四校の「日本語文学系」出身で、その後の日本留学で専門分野の訓練を受けた若手の研究者と、これらの研究者を育てた教師によって支えられてきた成果でもあろう。

それから、三章でも述べたように、国際会議は、台湾の日本文学の研究活動を支えるのになくてはならない存在である。なお、日本文学の研究論文は、どの時代のものもそれぞれ少しずつ発表されているものの、まだ日本語学や日本語教育の分野と比べられ

ない状態である。論文の本数も、中古と近代が他の時代よりも多い傾向にある。以上取り上げた八校の文学専攻の専任教師の専攻別で分けてみると、三六名のうち、近代が一九名、中古が九名で、約四分の三を占める。中古の九名のうち、輔仁大学は五名（去年まで六名）も占めている。これは、日本古典文学の教育を重んじてきた成果の一方、指導教官からの影響もあったからであろう。しかしながら、中古にしても近代にしても研究対象は限られているようにも見うけられた。

また、伝統的なジャンルの分け方でいうと、学会で取り上げられたジャンルは、殆ど小説、物語といったストーリー性の高い散文に限られている。和歌、連歌、近代詩といった韻文のジャンルも多少見られたが、戯曲のジャンルの研究は殆どない。それから、ここ五年内に学会で発表された作家・作品の回数は、啄木が三回で、一位と、漱石二回で、二位となった。この傾向は、前述した研究紀要を有する五校の傾向とはあまり変わらない。この五校の研究紀要の順位は、漱石（五回）、啄木（三回）、芥川（三回）、『源氏』（三回）、『平家』（三回）となっている。これらは、台湾でここ数年よく研究されている日本の作品とは言えるが、しかしまだ研究対象が集中していないことも伺える。

最後にもう一つ考えられるのは、やはり前述した〈本土化〉からの影響が見えてきたことだろう。それは単に研究対象のみならず、二〇〇一年前後「中華民国日本語文学会」と「中華民国日語教育学会」が大体同じ時期にそれぞれ「台湾日本語文学会」と「台湾日語教育学会」に変更されたことからも窺い知れる。

六

以上四章にわたって日本語関係の大学、学会を通して台湾における〈日本文学研究〉の一端を概観し、いくつかの傾向を見てきた。この台湾の〈日本文学研究〉は、まず日本の植民地政策で戦前〈母国語〉として日本語教育を受けた台湾の知識人に文学専門家が少なかったことや、戦後反日感情を持つ政府の方針のため、日本語関係の人材や大学での日本語教育や日本語学・日本文学の研究の中絶が起きた。その時期、〈日本文学研究〉はいうまでもなく、日本語学、日本語教育もあまりなされてこなかった。実際に関心を寄せられるようになったのは、九〇年代に入ってからで、日本語文学会、日本語教育学会、東呉大学博士課程設置、そして文学研究を方針とした輔仁大学修士課程の設置以後のことであろう。ただし、この時期の〈日本文学研究〉は、英文学研究ほど重要視されず、文学研究のジャンルのみならず、日本語教育の分野も依然として周縁的な位置にあった。また、文科系の非実用性が問題視されるようになり、一九九六年以後に〈応用的〉な風潮に乗って設けられた「応用日本語学科」からの挑戦に面し、「日本語文学系」も、台湾本土の研究に役立つことをめざし、教育（カリキュラム）や研究（対象・方法）の方向を進めてきた。具体的には、台湾の日本語教育学会、日本文学研究（者）の中でも台湾文学と日本文学にまたがる〈本土化〉の問題に関心を寄せた教育・研究が行われ始めている。こういった研究動向の変化と連動して、教育面でも例えばいくつかの大学で「台湾日語文学」、「台湾日文資料導読」「台湾日文資料研究」、「台湾文学與日本文学比

較研究」といった科目が設けられるようになった。ほかに、〈本土化〉のダイナミズムに乗ったうえで、台湾社会のために積極的に発言し、台湾と日本の間の回路を作り出そうという要請により、台湾の日本文学者を主体として結成された「台湾文学協会」では、「中日現代詩研討会」「中日近代詩研究会」「文学翻訳賞」といった文化交流、研究も行われている。特に注記しておきたいのは、前述したように「近代日本與台湾研究」というテーマで開催された国際会議であり、また、現代西洋の文学理論も〈本土化〉及び〈グローバル化〉の論調とともに、台湾の日本文学研究の分野のみならず多くの分野に影響を与えるようになった結果、台湾の英文学以外の外国文学（仏、獨、伊太利、西班牙、日本）の研究動向を台湾と世界の国々へ紹介するため、季刊誌『世界文学』が発行されるようになった。これらの動きと並行して、前述の大学や学会では国際会議が頻繁に開催されるようになったのであり、ここにいたってようやく台湾における〈日本文学研究〉の方向性が見えてきたと言えるだろう。そして、こういった動きの中でこそ、〈日本文学（研究）〉に対する意義・理解もより深められていくのではないだろうか。

付記

（1）今回参考にしたのは各大学の公式ホームページ、或いはパンフレット等に載せられていたものである。参考までに以下に記しておく。

1　文化大学日本語文学系
http://db.pccu.edu.tw/dept/crg_group/

2　東呉大学日本語文学系
http://www.scu.edu.tw/japanese/

3　淡江大学日本語文学系
http://www.tku.edu.tw/Graduate/

4　輔仁大学日本語文学系
http://www.fju.edu.tw/~japan

5　政治大学日本語文学系
http:// Japanese.nccu.edu.tw/intro.htm

6　東海大学日本語文学系
http://www2.thu.edu.tw/~japan

7　台湾大学日本語文学系
http://www-ms.cc.ntu.edu.tw/~japanese

8　静宜大学日本語文学系
http://www.pu.edu.tw/~japan

（2）今回の報告では「日本語文学系」に焦点を置いたため取り上げなかったが、「応用日語学系」等でも文学関連の講座は開かれているし、それを担当可能な教師や研究者も各校にいることを一言断っておく。

（3）去年ＷＴＯ（国際貿易組織）に加入して以来、台湾の大学は、教学と研究の競争力を高めるために大学連盟の声が高まってきた。その動きの中で初めて実践されたのは、二〇〇二年三月二四日に国立大学の交通大学、清華大学、陽明大学、中央大学の四校において連盟の契約を結んで設立された「台湾聯合大学系統」である。それに続いて国立台湾大学、政治大学、成功大学、中山大学の四校でも「台湾大学系統」を連

盟として設置するように同日、正式に発表した。今後の動きが注目されている。

（4）今回の報告を執筆するにあたっては、文化大学の林栄一先生、台湾大学の范淑文先生、東海大学の紀朝栄先生、淡江大学の顧錦芬先生、政治大学の王淑珍助手、同卒業生丁瓊琳さん、そして輔仁大学の坂元さおり先生、八尋恵美先生、同大学院生劉佳瑄さんからご協力いただいた。この場を借りて一言感謝の意を申し上げる。

（輔仁大学日本語文学系講師）